

「ありふれた『まちかど』図鑑」の編纂とその住環境改善ガイドラインとしての
の実用化

代表：谷口守（岡山大学大学院環境学研究科 教授）

松中亮治（岡山大学大学院環境学研究科 助教授）

中道久美子（日本学術振興会 研究員）

〔研究報告要旨〕

ガソリン消費量を削減しサステイナブルな社会を実現するためには、都市コンパクト化が重要な対策であることは既に多くの既存研究で示されている。そして、実際に多くの行政主体が都市コンパクト化を政策として推進していくことを表明している。さらに、日本の都市部の人口構造は急激に変化していく。どの都市においても都市活動が郊外から撤退しており、それが都市構造計画において深刻な問題を引き起こしている。このような都市構造変化に対応するため、視点（都市計画に利用できる判断材料）を明らかにする必要がある。

これまでの研究では、主に都市等の大きなスケールにおいてコンパクトシティの効果を明らかにしているが、これらは実際の政策スケールには対応していない。そのため、実務においてその研究成果を活用することができず、行政主体は都市コンパクト化を推進できていない状況にある。もし実際の政策スケールにおいて都市コンパクト化政策を検討することのできるデータベースを開発することができれば、コンパクトシティを実現しサステイナブルな社会を実現するために役立つだろう。さらに、その際、また、都市計画の専門知識が乏しい人も含めて誰もがこのデータベースを理解することができ、具体的なイメージを持って都市整備を検討することができる必要がある。

本研究では、都市スケールではなく、実際の政策スケールに対応した 20ha 程度の住宅地スケールにおいて、データベースを構築することを目的とする。換言すると、本研究ではその住宅地タイプに該当する住宅地で実際に撮影した写真を含む「まち図鑑」を開発することを目的とする。

本研究の特長として、データベースが日本の都市に存在する全てのタイプの住宅地を網羅しており、土地利用やガソリン消費量、自動車依存度、居住者の意識など様々な指標を具備していることである。